シリーズ 障害者の就労事例23

病院の星

児玉恵理さん（東京都八王子市 駒木野病院）

KOTONONE Series of Stories vol.23

精神科の専門病院がつくった、障害者の働く場

福祉の「プロ」であるかどうかは関係ない。
雇用を広げるために必要なのは、
職場の理解と共感だ。
精神科の専門病院で目にしたのは、
周りの理解と共感に支えられ、
自分らしく働く一人の障害者の姿だ。

障害を打ち明けたが理解されなかった

東京都八王子市にある駒木野病院は、東京の精神科専門病院の草分け的存在。開院は一九二七年（昭和二年）、精神科専門になったのは戦後のことだが、地元では古くから知られた病院だ。

その駒木野病院ソーシャルワーク科事務担当として二〇一三年から働く児玉恵理さんは、若い頃から統合失調症に苦しめられてきた。「高校生のとき、受験をきっかけに発症して。なんとか大学には入れたんですけど、就職はとても考えられませんでした」。

卒業後は、学生時代から働いていたクリーニング屋さんでのアルバイトを続けていた。卒業後、五年ほど経ったときに、仕事を辞め、障害者枠での就職を目指すことを決意する。「障害があるとは言わずにはじめたアルバイトでしたが、どうしてもミスが重なったり、調子の悪いときがあったりして、店長から怒られることが増えてきて。もう限界だと思って、ある日、自分の障害を職場で打ち明けることにしたんです」。自分のことをわかってほしいという思いから

編集部=文
text by KOTONONE
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto